

横山ゆずり作 「いじめ」

< 前編 >

(効果音) (教室のガヤ)

男子 えー、ほんとかよ。

女子(数人) 「ねえ、何、何?」「それがさ、すごいよ。渡辺さんが...。」「え、ほんと? ラブレター?!」

男子 あんなクライやつからもらっても困るよな。

女子 シー!

(みんな静まる。渡辺佳代、教室に入ってくる。小声のガヤ続く。)

渡辺佳代 おはよう。

女子1 お、おはよう。...あ、あのさ、渡辺さん。あなた、昨日さ、B組の石倉く...(言いかけてさえぎられる。)

女子2 (小声)バカ! シー!

女子1 (小声)何よ。だって、本当かどうか真相を知りたいじゃない。

女子2 (小声)だからって、よりによって、本人に聞くことないでしょ。

佳代 なんかわたしに?

女子2 ううん、なんでもないから。

女子1 そうそう。

竹中保美 渡辺さん、あんな、B組石倉君に手紙出したんだってえ? 知らなかったあ。あんなみたいにおとなしくてまじめくさった子が、(意地悪そうに)ラブレター書くなんてね。

女子1 え? じゃ、やっぱ本当だったの?

保美 人は見かけによらないもんね。

佳代 何のことですか?

保美 とぼけないでよ。みんな知ってたから隠すことないじゃん。それに、その「ですか」っての、やめてよね。なんかこっちまで暗くなっちゃうよ。

女子2 やめなさいよ、竹中さん。

保美 何よ。だって本当のことでしょ。

佳代 あたし、手紙なんて書いてません。B組の石倉君なんて、話したこともないし。

保美 あーら。だってB組の男子もみんな騒いでるわよ。あのクソまじめの石倉君とお宅、ピッタリだって。お似合いじゃーん?

女子2 竹中さん、言いすぎよ。

保美 あーら、ごめんなさい。それにしても...。

(効果音) (教室のドアが開き、先生が入ってくる。)

担任 ちよっと！何騒いでるんですか？ とくに鐘は鳴ってるんですよ。
(効果音) (ガタガタ席に着く。)'起立'礼

担任 おはようございます。では、今日の連絡事項を言いますから、よくメモして…。

女子1 (小声)ねえねえ竹中さん。さっきの話、ほんと？ 渡辺さんがラブレター出したって話。

保美 (小声)そうよ。あの方たちにも遅まきながらようやく春が来たってわけよ。あの2人、今日帰りに校門のところで待ち合わせよ。

女子1 (小声)え？ そんなに進んでんの？ すっごーい！ でも竹中さん、何でそんなに2人のこと詳しく知ってるの？ 待ち合わせの場所まで。

保美 (小声)そりゃ、だってあたしが考えた…。(ハッとして口をつぐむ)

女子1 (小声)え、ちよっとお、もしかしてラブレター出したの、竹中さん？ 渡辺さんの名前使って…。

保美 (小声)シー！ シー！ だれにも黙ってるのよ！ みんなあの子が出したと思ってるんだから。言ったら承知しないからね。

女子1 (小声)う、うん、分かった。でもなんで？ なんでそんなことしたの？ よりによってあんなおとなしい子にさあ。

保美 (小声)ほんの軽いジョークだって。それにさ、なんかあの子見てるとムカついてくんのよ。いつも「自分はまじめです」って顔しちゃってさ。

女子1 (小声)ふーん。しかしよくやるよ。たださ、もしこのことが…。

担任 その2人、さっきから何しゃべってるんですか？ 5時間目の理科の実験はどこの教室って言いましたか？

女子 えーっと、…すみません。

担任 大切なことですから、しっかり聞いておきなさい。では学活は終わります。あ、竹中さん、昼休みにちよっと職員室に来なさい。では。

(効果音) '起立'礼(ガタガタ、イスの動く音)

保美ナレーション あたし、竹中保美は青春中学3年。このごろ、正直言って少しイラついてる。3年になったら、とたんに先生も親も、「受験、受験」ってうるさく言い出すし、特に月1度のコンピューターテストは最悪。偏差値がなんだって言うのよ。もうムカつく。それに学校では、「生活態度を引き締めれば、気持ちも引き締まる」都会って、持ち物検査とか、服装検査とか、前以上に厳しくなったし。もう、なんか息抜きしなくちゃやってらんないって感じ。それに、いかにもまじめって顔してるやつも、頭くる。だからつい…。

(効果音) (教室のドアをノック)

保美 失礼します。

担任 あ、竹中さん。早速だけど、あなたにちよっと聞いときたいことがあるの。昨日お母さんがお見えになってね。受験のことでご相談があるって。それでね、あ

あなたの高校進学について、熱心に考えていらっしゃるのは分かるんだけど、青春高校希望っていうのはどうかと思うのね。

保美 青春高校？ うちの親、そんなこと言ったんですか？

担任 あら、じゃやっぱり本人の希望じゃなかったのね？ はっきり言って、竹中さんの今の成績では、公立の普通科っていうのは無理でしょ。商業か、私立の単願ってことになると思うけど、まあそれは急いで決めることないんだけど、昨日、お母さんにそうお話ししたら、「とんでもない」という様子だったから。それでね、あなたの5教科の成績が伸びないのは、学校の授業のやり方が悪いっておっしゃるのよ。理科の山下先生は説明の仕方が早すぎるとか、数学の久保田先生は雑談が多くてすぐ脱線するとか。先生はね、はっきり言って、あなた自身のやる気の問題だと思うんだけど。3年になってから、遅刻や体育の見学がずいぶん多いみたいだし。どうなの？

保美 すみません。

担任 ま、いいにくいかもしれないけど、その辺のところ、お母さんにもあなたのほうからきちんとお話ししておきなさい。

保美 はい。失礼しました。

教師 A (オフ)いや、大変な親もいるもんですな。

担任 自分の子の出来の悪さが教師のせいになっちゃうんですからね。

教師 A 全く、子供の現実をもう少し見つめてもらわんとね。

(教師たちの笑い声)

保美モノローグ 何よ。お母さんたら勝手なことして。みっともないったらもう。お陰で恥かいたじゃったじゃないか。先生たちまで、人のこと笑いものにして。チクショー、ムカツくなあ、もう。

(効果音) (玄関の戸を開ける)

母 保美なの？

保美 (無言)

母 「ただいま」くらい、言ったらどうなの？

保美 昨日、先生のところ行ったでしょ。

母 ええ、行きましたよ。

保美 なんでそんな勝手なことすんのよ。お陰であたし、大恥かいたんだから。

母 なんです、いきなり。相手が先生だからって、遠慮することないんだから、言うべきことは言わなくちゃ分かんないでしょ。

保美 冗談じゃないよ。成績悪いくせに、ずうずうしいと思われてんだから、みっともないマネしないでよ。

母 何向きになってんの、この子は？ 今日はお客様なんですからね。

裕子 こんにちは、お邪魔してます、やっちゃん。

保美 裕子姉さん。
母 裕子ちゃん、わざわざあなたにとって、参考書とか問題集とか持ってきてくれたのよ。
裕子 あたしが高校受験の時、使ったのだけど、結構役に立ったから、やっちゃんもよかったら使って。
保美 あ、どうも。
母 「どうも」じゃないでしょ。いとこがわざわざ届けてくれたんだから、もっとなんとか言いようがあるでしょ。
保美 うるさいんだよ、いちいち。
母 なんなの、その口の利き方は？ もう最近こうなのよ、裕ちゃん。何が気に入らないんだか知らないけど、八つ当たりばかりで…。(F0)
ナレーション いとこの裕子姉さんは、高校3年生。頭よくて、優しくていい人だけど、いくらいところからって、何かと言うと比べられるのには参っちゃう。教会に通ってて、わたしもちっちゃいころは教会学校とかクリスマスとか連れてってもらったけど、今は、はっきり言って、人種が違うって感じ。あたしは、逆立ちしたって裕子姉さんみたいにはなれないし。
(効果音) (教室のガヤ)
担任 これから臨時の持ち物検査を行います。
一同 「えー！」「ずるい」など。
担任 3年になったというのに、受験生としての自覚が足りないようですね。勉強に全く関係のないゲームや、漫画、女子の小物など、最近目に余るので、今日は抜き打ちで行います。はい、生活委員、前へ出て。全員立ってカバンを机の上に出しなさい。
(効果音) (机に物を出す音)
一同 (口々に)「やっペー」「あたし、リップ持ってきてちゃった」「あたし、光 GENJI の写真。
生活委員 はい、じゃ次。竹中さん。
保美 あたし、何もないよ。ほら、ほら！
生活委員 あ、腕時計してる。それ違反ね。はい、外して。(メモする)
保美 あーあ、はいはい、出しゃいいんでしょ、出しゃ。
(効果音) (ガヤ続く。「はい、次の人」)
担任 それじゃ、没収された者は、放課後残って、一人ずつ相談室に来なさい。
ナレーション ところがその日、相談室に行ってもあたしの時計は返してもらえなかった。昼休み、先生が目を離れた際に、だれかに取られたのか、紛失か、あたしの新品の腕時計、どうしてくれるのよ。
担任 おかしいわね。確かにこの袋の中に、ほかの生徒のと一緒に入れといたんだ

けど。

教師 A ま、すぐに出てくるだろう。そしたら返してやるから。それに竹中、お前にも責任はあるんだぞ。決められた以外のものを学校に持ってきたんだからな。ま、これに懲りて、校則はきちんと守ることだな。

保美 どうしてですか？勝手に没収しといて、おかしいじゃないですか。あとで返してくれるって言うから渡したのに。

担任 でも、あなたが違反したのよ。

保美 分かってます。でも、だからって、生徒のものを取り上げておいてなくすなんて、冗談じゃない。返してください。

教師 A 分かった分かった。もう一度捜してみるから。やれやれ、親が親なら子供も子供だな。

保美 どういう意味ですか？

教師 A (強い調子で) 実力もないくせに、理屈だけは一人前だと言っているんだ。こういふときだけ偉そうな口を利くな。劣等生のくせに！

保美 劣等生?!(多重エコー)

ナレーション あたしの頭の中に、熱い塊がカーッと上っていった。

<後編>

教師 A 出来の悪い劣等性のくせに、こういふときだけ一人前の口を利くな。親も親なら子供も子供だ。生意気言うな。

保美 なんですって?!

担任 まあ先生、それくらいにしといてやってください。竹中さん、あなたも落ち着いて。時計はなるべく早く捜して返すから。

保美モノローグ そういうことだったのか。結局、あたしらみたいな出来の悪い生徒を見る先生たちの目っていうのは、そういうもんだったんだ。つい本音が出たってわけだ。そっちがそのつもりなら、こっちだって、もうイヤイヤでもいうことを聞くフリなんかするもんか。落ちこぼれは落ちこぼれなりに、徹底的にやってやる。

ナレーション 悔しかった。成績がよくないということで、まるで何も言う資格がないみたいに扱う先生たち、それに学校。そして、そんな学校の言うことをおとなしく、まじめに、いや、まじめなフリして「はいはい」って聞いているやつら。それら皆が憎らしかった。あたしは、その悔しさのハケ口を、まじめぶったやつらに向けることで、先生たちに傷つけられた気持ちを、無意識のうちにいやそうとしていたのかもしれない。まずは第1のターゲット、渡辺佳代。

(効果音) (教室のガヤ。女子数人のオシャベリ)

一同 「それでさあ、あたし、もう頭きちゃってえ」「分かる分かる」「何よ、そいつバカじゃん」「ほんと、ムカついたよ。超ムカつき!」「超だせーよ、そんなの」

保美 ちよつと渡辺さん。何、あたしたちの話、盗み聞きしてんの？ やめろよな。

佳代 え、そんな。あたし、聞いてなんかいません。

保美 そんなこと言ったってさあ、そこでジトーツと座ってられたんじゃ、ウザったくてしょうがねえよ。なあ、みんな。

女子数人 「やっだー、悪いじゃん」「保美ったら」「ごめんなさいねえ！」(笑い合う)

男子 (小声)おい、お前ら、注意してやれよ。最近毎日だぜ、あいつら、渡辺のことイビってんの。

女子1 そうなんだよね。渡辺さん、おとなしいから、かわいそうとか思うけど、でも、ねえ。

女子2 うん。竹中さんたち、怒らせると、おっかないんだもん。

男子 じゃ見ないフリかよ。

女子1 そんなこと言うんなら、男子が注意してあげればいいでしょ。

男子 できるかよ、そんなこと。

女子2 ほら、自分だって怖いせに。

保美 なーに？ だれが怖いって？

男子 いや、なんでも…。

ナレーション 別に、渡辺佳代に個人的な恨みがあるわけではなかった。ただ、あのこが、たまたま近くにいる目障りなやつ一人だったから、お気の毒様。あんたたち、先生のご機嫌取り。学校のロボットみたいな子たちに、あたしは我慢がならないの。悔しかったら、言い返してごらんよ。できないんだろ、怖くて。だったらせいぜいウジウジしてな。

保美 ちよつとあんたたち、だれがだれをいじめてるって？ だれが怖いって？ 先生にチクったりしたら、どうなるか分かってんだらうね。今度は自分たちが痛い目見ることになるんだからね。

ナレーション ところが、そんなある日のホームルームのことだった。

担任 最近、また新聞なんかでも、よく取り上げられているので、みんなも聞いていると思うけど、先日、都内の中学でいじめによる自殺がありました。うちの学校では、まさかあんなひどいことする生徒はいないだろうと、先生たちはみんなを信頼していますが、万が一にも、あのような悲しい出来事が起きないように、この時間を使って、みんなにも少し考えてもらいたいと思います。このクラスは、幸い、今のところ、だれかが仲間外れにされたり、意地悪されたりということはないようなので、先生は安心してはるんですが…。

男子生徒 (セキ払い)

担任 何？ どうしたの、小倉君？

男子 え？ い、いえ、何でもありません。(モノローグ)こえ～、竹中のやつと目が合っちゃった。ヤバいぜ、こりゃあ。

担任 ではこれから、いじめに遭ったことのある一人の女生徒の作文を読みますから、聞いてください。

ナレーション そのあとで、感想文を書かされた。

保美モノローグ バッカみたい。そんなの、みんな、「いじめは悪いことです。相手の立場になって考えれば、いじめもなくなると思います」とかなんとか、いいこと書くに決まってるじゃん。どこに「いじめって最高に快感！ 楽しくてやめられない」なんて本音を書くやつがいるかっていうの。だからって、あたしらの感想文読んで、“うちの学校はいじめがない”なんて安心しているようじゃ、大ボケだね、先生なんて。張本人のあたしが言うんだから間違いないって。何がいじめだよ。本当のいじめの犯人は、先生たち、あんたじゃないか。人の成績を盾にとって、弱い者いじめして喜んでるのは学校じゃないか。それを、生徒にばかり“思いやり”だとかなんだとか要求したって、間違っているって言うんだよ。いじめなんて、なくなるわけがないんだから。

担任 いいですか。そろそろ書けたら出してください。では今日はこれで終わります。

(効果音) (ガヤ)

ナレーション それから何日かたって 。

保美 (セキ)お母さん、体温計どこ？

母 あら、保美。どうしたの？ ひどい声。風邪だわね。

保美 ひえー、37度7分か。頭痛い。あー、だるい。

母 あら大変。今日は休んだほうがいいわね。

保美 今日…。今日は休みたくないんだよなあ。来月の修学旅行のグループ分けあるはずだもんな。せっかく気の合うもの同士、組んでいいことになってんのに。

母 冗談じゃありませんよ。無理して肺炎にでもなったら、それこそ修学旅行どころじゃないんですからね。

保美 チェ。ま、しょうがねえか。昌子たち、あたしも同じグループに入れといてくれるだろうし、今日はフケてやるか。

ナレーション ところが、風邪で3日学校を休んで、学校へ行ってみると…。

(効果音) (教室のガヤ)

保美モノローグ 学校も久しぶりだといいいもんだねー。おっ、修学旅行のグループ、張り出してる。やっぱ、あたしが休んでる時に決まったんだ。えーと、あたしはっと、…あ、正子たち、B班か。そんならここか。えーと…ウソ。あたしの名前がない。なんで？ C班… D班… ない。どうして？ あ、「I班。竹中保美(B組)、菅原恵子(F組)、高柳宏美(G組)。」何これ？ 残りもんの寄せ集めの班じゃない、これじゃ。ひどい。正子たち、同じグループになるうって言ってたのに。裏切って、あたしだけのけ者にするなんて。あ、ちょっと、正子。

正子 (白々しく)あ、風邪治ったの？ もう大丈夫？

保美 ちょっと、どういうことよ。あたしだけ、なんでよその組の子たちと同じ残りもんの班に行かなくちゃなんないの？ 人が休んでる間に、ひどいじゃない。

正子 悪いけど、しょうがなかったんだ。だって一グループで5人って言われたから。それに、あたしだけじゃなくて、ほかの子たちも、なんとなく気に入った子たちで集まったら、こうなっちゃったんだから。

保美 じゃ、あたしは邪魔者ってこと？

女子 (遠くから)正子～。修学旅行のバスの座席のことだけどさぁ！

正子 うん、今行く～。じゃ、あたし行くから。保美、ひと言言っとくけど、グループ分けやった時、あんたと一緒に組みたいって言った子、うちのクラス、一人もいなかったんだよ。やっぱり日ごろの行いに気がついたほうがいいんじゃない？

保美モノローグ ひどい。今まで仲間だと思ってたのに。みんなして人のことシカトして。今まで、一緒になって渡辺佳代のこといじめたりしてたくせに、今になって人に責任なすり付けて悪者にして。これじゃまるでいじめじゃないか。よりによってあたしがこんな目に遭わされるなんて。

ナレーション その日から、あたしは学校を休み始めた。今まで、あたしがクラスメート渡辺佳代にしていたことを、今度はほかの子からされるのかと思うと、とても学校へ行く気はしなかった。何日たっても行こうとしないあたしを心配して、母は、いとこの裕子姉さんを引っ張ってきた。

裕子 保美ちゃん。お母さん、心配してたわよ。あんなに気の強かった子が、どうしちゃったんだらうって。

保美 その気の強さが、災いしちゃったんだ。

裕子 災いって...なんかあったの？よかったらあたしに話してみてよ、気軽にさ。

ナレーション クリスチャンの裕子姉さんは、本当にあたしのこと心配してくれて、でも決して、お説教じみたり、責めたりする調子じゃない、気軽な聞き方は、あたしの気持ちをほぐしてくれたようで、いつの間にかあたしは、今までのこと、クラスメートをいじめたこと、今度は自分が友達にシカトされたことなんか、みんな話していた。自分の恥になることも、なんか話してしまうと、少しすっきりした。裕子姉さんは、いつも優しくあたし話を聞いてくれる人だから、この時もあたしは、慰めてくれると思っていた。ところが...

裕子 やっちゃん。それは、はっきり言って自業自得だよ。自分がやってきたことを、そっくりそのまま人に返されたってわけでしょ？ そしたら、急に怖じ気づいちゃったのかな。それは少し勝手ってもんじゃないの？

保美 はぁー、裕子姉さん、キツイこと言うなぁ。

裕子 ごめんごめん。でも、当たってるんじゃないの？ よく「相手の立場に立って」なんて言うけど、やっちゃんは、自分がやってきたクラスメートの立場に今、初めて立ってるわけでしょ、痛い思いしながら？ それはね...

ナレーション　　今まで、人との関係を、そんな風に考えたことはなかったけど、裕子姉さんと話していて、自分が本当は何を求めていたのか、何にあんなにいらだっていたのか、少し分かってきたみたいだった。

保美　　あたし、明日から学校へ行く。もう遅いかもしれないけど、でも、もう一度、あのクラスへ、あの学校へ戻って、どこまでやれるか、やってみる。

<完>